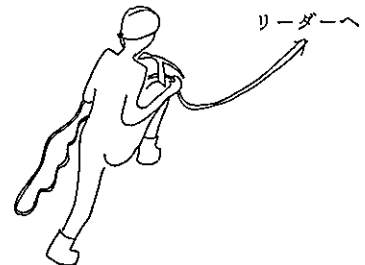


指導者養成について

松本 憲 親

筆者は1975年からほとんど毎年雪上技術講習会（当時は一般山岳団体指導者春山研修会の名称であった）の講師をつとめています。22年もの長い間には講習内容の変遷もありました。新任実技講師の中にはスタンディングアックスビレイ(SAB)を実践していない方もおられました。実践によって磨いた異なった技術がいくつかあったのです。松永氏のSABの論文が「岩と雪」に掲載されたのが1972年ですから無理もないことです。その中に水戸山の会の荒木浩二さんの技術が非常に印象的で筆者は今でも評価しています。この技術はジョイナー著の「アイスクライミング」に記載されている「ヒップアックスビレイ(HAB)」とよく似ています。図1に荒木氏の方法のスケッチを示しましたが、山を向いて膝でアックスを支えるところから仮に「ニアアックスビレイ(KAB)」と呼ばせていただきます。筆者はSABも使っていましたが、SABとHABのコンビネーションのようなSABのスリングを延ばしてその上に谷を向いて尻を置いてビレイする方法やOMを場合によって使い分けていました。指導者の養成と自らの登攀の実践とに乖離があって当然で、今もSABの有利な箇所、例えばラントクルフトでリーダーをビレイや下降するときのビレイにSABを使います。研修生には先ず滑落停止、次いで歩行、そしてSAB、そのうえOM、仕上げは剣岳登頂後増子春雄主任講師直伝の新ケーニッヒ確保、下山中にタイトロウプビレイ。それで時間一杯になる。1985年ころまではこのパターンで講習を行って来たが、そのうち研修生がOMを実践する程のレベルに達しない状況になってきました。ということはSABの習得度も低くなっているということで、新ケーニッヒ確保をSABでスムーズに行える研修生が減って来たということです。筆者が主任を担当するようになった平成3年(1991)から雪上の確保はSABの理論的な理解を踏まえて教えることができるように力学的な解析を進め、それを講義して来た。携帯用のロードセルが購入されたのでフィールドで実験できるようになり、冒頭に挙げた新旧の技術の定量的な評価が可能になろうとしている。OMの理論的解析も終了しているので、これも評価の対象になる。この路線で新しい研修内容が固まて行くと思われれます。昨今の研修生は基礎体力のみならず文献から得られる知識とその実習にも欠けている。これは昨今のアルパインクライミングの不人気と軌を一にしているように思える。であれば言うだけでは事は解決しないのではなからうか。研修内容が魅力的に思えるようにアレンジすることも、講師自ら魅力的な登山を実践する事も必要なことではないでしょうか。



(雪上技術講習会主任講師)

図1